

新学習指導要領から新しい学びを読み解く

—望ましい人間関係の構築をめざす学級づくりの観点から—

常田 拓孝

抄録：次期学習指導要領が公示され、2030年の社会、さらにその先の社会を築くための教育のあり方について述べられている。児童生徒が学校での学びを通じ、学ぶことの喜び、人々と協力しながら作り上げることの感動を体験し、探求することの好奇心を得て、生涯にわたって学び続ける人の育成が強調されている。この新しい教育では、児童生徒が学ぶ教室を中心とした集団の有り様が大きな影響を与える。本稿では、学級における集団の形成のあり方、そして集団の中で学ぶことができる人間関係の構築の必要性について述べた。

キーワード：主体的・対話的で深い学び、望ましい人間関係、特別活動

1. はじめに

平成29年3月31日、次期学習指導要領が公示された。改定スケジュールによると、小学校は平成32年度（2020年度）、中学校は平成33年度（2021年度）から全面実施される。周知・徹底期間を経て、平成30年度から小中学校とも先行実施がイメージされている。各小中学校では、学習指導要領の読取り、そして教育課程の編成、指導計画の立案等と準備することが多く、残された時間はそう長くはない、というのが実感ではないだろうか。平成28年の中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について（答申）」（以下「中央教育審議会答申」と表記する。）では、2030年の社会、さらにその先の豊かな未来において、一人一人の子どもがよりよい人生と社会を築いていくための初等中等教育の役割について強調している。

複雑多岐に変化するであろう社会を生きる子どもは、自ら考え判断し、よりよい社会を創造する担い手としてなっていけるようにすることが大切である。これからの社会や世界の姿は予想がつきにくく、展望もままならないとされ、変化に主体的に対応でき、学び続ける人材を育成することが必要である。

新しい学習指導要領の基に、どのような教育の展開が期待され、学校はどのように対応すればよいのかについて、児童生徒の人間関係づくりをめざす学級づくりを視点に述べることとする。

2. 新学習指導要領から新しい学びを読み解く

日本をめぐる内外の環境が激しく変化するこれからの時代において、求められる資質・能力の一つに、自ら課題を設定し主体的に解を見いだす能力、自らの意見を論理的に発信する力、多様性を尊重して他者と協働して事業を遂行する能力であることが指摘されている（日本経済団体連合会2016）。このことは、児童生徒が学びの主役として活躍し、さらに学校を卒業してからも社会において、自ら進んで学び続ける人間の育成が求められていることを示している。

これらは、まさにアクティブ・ラーニングの必要性が指摘されているとともに、学校教育での学び

の有り様の再確認と新しい視点の構築が求められているのである。様々なところで言われているように「何を教えるか」だけでなく「どのように学ぶか」が重視される。学習する子どもの視点から、育成をめざす資質・能力を三つの柱として、①何を理解しているか、何ができるか（生きて働く「知識・技能」の習得）、②理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成）、③どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養）であると整理し示している（中央教育審議会答申 2016）。この資質・能力の三つの柱は、学校におけるすべての学習の基盤として活用されることが期待されている。それは、まさに「主体的・対話的で深い学び」を実現するための、学校教育における授業の改善の視点を、①「主体的な学び」の実現、②「対話的な学び」の実現、③「深い学び」の実現としているのである（中央教育審議会答申 2016）。

これらのことは、大きな変化が起こる社会において、一市民として、自らと関わる人々と協調して様々な課題に取り組み、問題を解決できる人間の育成が求められ、それに伴う学校教育への期待が変化していることがわかる。

これらのことから新学習指導要領では、児童生徒が学校での学びを通じ、学ぶことの喜び、周囲の人々と協力しながら作り上げることの感動、探求することの好奇心を得て、生涯にわたって学び続ける人の育成をめざすことが強調されている。

3. 人間関係づくりの視点

「主体的・対話的で深い学び」の根底となっているのは「アクティブ・ラーニング」である。周知のようにアクティブ・ラーニングは、文部科学省の用語集には、「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である」としている。これは、大学教育等の高等教育について記述しているため、小中学校教育での学習において具体的なイメージが難しい場合もある。これらの実現のために、小中学校教育では先に述べた「主体的な学び、対話的な学び、深い学び」を日々の授業で展開しようとしているのである。

具体的な指導方法や教材研究の方法、授業アイデア等が多くの著書で示されており、学校での授業展開の提案や事例はあふれている。例えば、中学校数学科における学習過程を①体験する（観察、操作や実験などを通して、事象にかかわる）、②発見する（事象へのかかわりを通して、問いを見いだす）、③説明する（根拠を明らかにして筋道を立てる活動を通して、試行を深める）、④利用する（身近な問題の解決に数学を利用する）、⑤振り返る（知識を再構成し、自分の思考を洗練し整理する）、⑥発展させる（新たな問いを見いだし、思考をさらに深める）、⑦協働する（ペアやグループでのかかわり合いを通して個人では解決できない課題を解決し、新たなアイデアを創発する）と提案している（江森 2016）。

この数学科における生徒にとっての学びのプロセスは、「主体的・対話的で深い学び」に対して整理、観点化されているが、上記の項目は真新しいことではなく、これまでも様々な実践例があり、この学びの過程は数学学習の基本的な姿であるとも言える。例えば、生徒一人一人が個々に課題をとら

え、解決に取り組み、その成果等をグループで学び合う学習は、数学的な関心意欲が高まることが示されている（常田・兵藤 2017）。これらのことは、教師がどのように教えるかの授業プロセスの検証のみならず、児童生徒の主体的で自発的な活動を展開しようとする児童生徒中心の授業のあり方が期待されているのである。学ぶ意義や有効性を意識した教科指導のあり方と問うとき、バスケットボールでのドリブルやシュート練習がうまいからといって試合を上手にプレーできるとは限らず、実際のゲームの中で感覚や能力が育てられる、と例えて言われることがある。これまでの教育はドリルばかりして、学校外や将来の生活で遭遇する活動を経験せずに学校を卒業している（石井 2015）と指摘している。学校現場での教科指導の工夫が日々重ねられ、指摘されているような画一的な学習ばかりではないが、今期待されている学びのあり方は、まさにイノベーションが求められているといえる。

このように、この改革について様々な提案や議論がされている。しかし、その主体である児童生徒が日々学ぶのは教室を中心とした集団である。集団の有り様が児童生徒の学習に大きな影響を与えることは周知のことである。児童生徒中心の授業の展開のために集団をどのように形成し、集団の中でどのように学ぶかについて論じられることが少ない。新しい教育の展開には、人間関係づくりの視点を欠かすことができないのである。

4. よりよい学びの創造

児童生徒の日々の学習の多くは、所属している学級を単位に行われる。学習の到達すべき目標は、児童生徒一人一人がその学習内容を理解し、身につけることである。そのための手法や手順は多岐にわたり、教科の特性や題材等の特徴などによって様々である。そして、学習のプロセスでは、児童生徒が一人で課題に取り組み、解決することよりも、学級の仲間とともに課題の解決方法を探り、見だし、解決する場面が多い。

その学習形態は多様であるが、学級の仲間との学習を児童生徒はどのように考えているのだろうか。

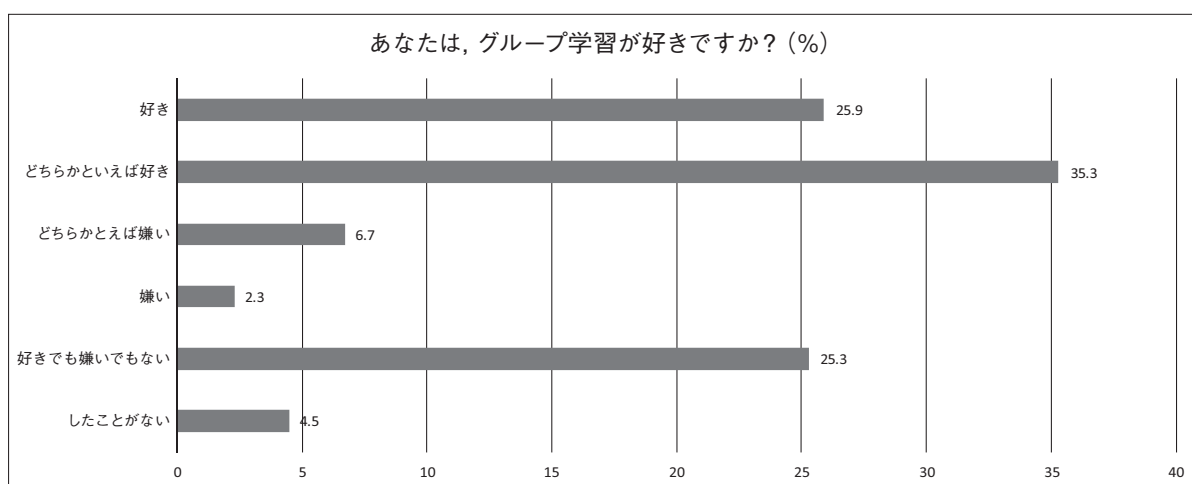


図1 「あなたは、クラスの子とのグループ学習が好きですか。」（改編）

図1は、「学研教育総合研究所 小学生白書 Web版」のうち、「あなたは、クラスの子と協力して調べたり、話し合ったりするグループ学習が好きですか、嫌いですか」の質問に対する小学生全学年を通しての結果を表した。グループ学習を好きだ・どちらかといえば好きだと答えた児童がどちらか

といえば嫌い・嫌いと答えた児童を上回った。

では、小学生はグループ学習のどんなところがよいと思ひ、またどんなところがよくないと思ひているのであろうか。図2は同様の調査のうち、グループ学習をしたことがあると回答した小学生への「あなたが、グループ学習でよかったと思うことはどんなことですか」の質問に対する結果である。「いっしょに調べるのが楽しい」、「授業がおもしろい」、「他の人の意見が聞け、グループの発表が楽しかった」の回答が上位を占めた。学級の仲間と協力して学習することに意欲的であることがわかる。

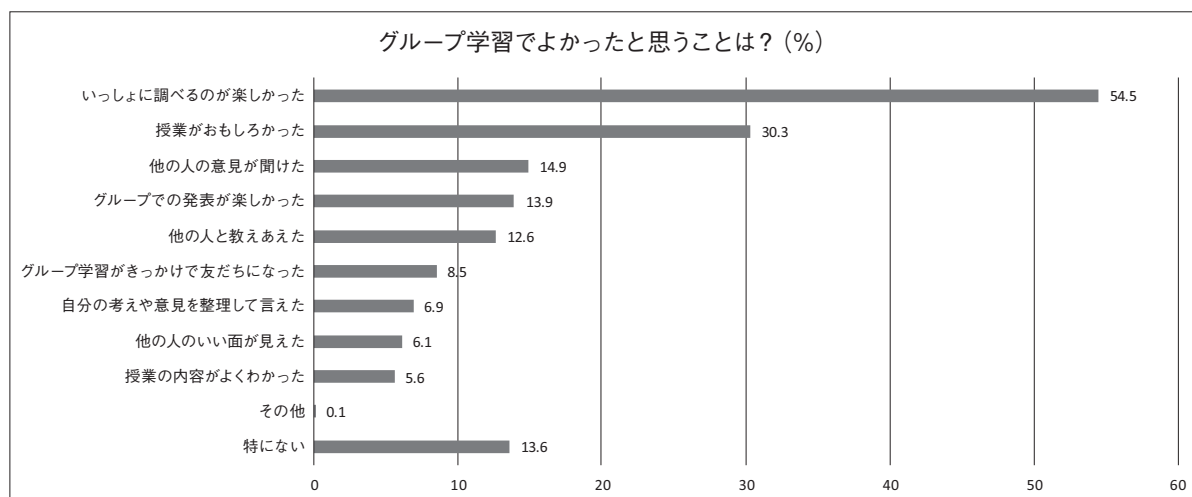


図2 「あなたが、グループ学習でよかったと思うことはどんなことですか。」(改編)

一方で、図3は「あなたが、グループ学習でよくなかったと思うことはどんなことですか」の質問に対する結果である。「意見がまとまらなかった」、「協力しない人がいた」、「役割分担がうまくいかなかった」の順に回答が多い。

小学生は、学級の仲間と協力して学習することは好きで、楽しみにしている。調べたり、自分の考えを発表し合ったり、聞き合ったりする学習に興味をもっている。ところが、実際の学習では、グループでの話し合いがうまくいかなかったり、協力体制ができずに学習が停滞するもどかしさを感じていることがわかる。

この調査からも、様々に求められている学校教育における「新しい学び」は、小学生においても日々の学習の場において取り入れられることを期待していると判断できる。そのような中でも、「自分の考えが通らない」、「一人でやる方がいい」とグループ学習が効果的ではない、と考える小学生もいる。役割を分担し、協力して調べたり、考えをまとめ発表する学習機会を多くするには、自分の考えを通すことだけを主張するのではなく、他者の考えに耳を傾け、調整し合いよりよいものを作り出すことができるような資質を身につける必要がある。

この学習が成立するためには、児童生徒が所属する学習集団において、望ましい人間関係がつけられていることが大切である。

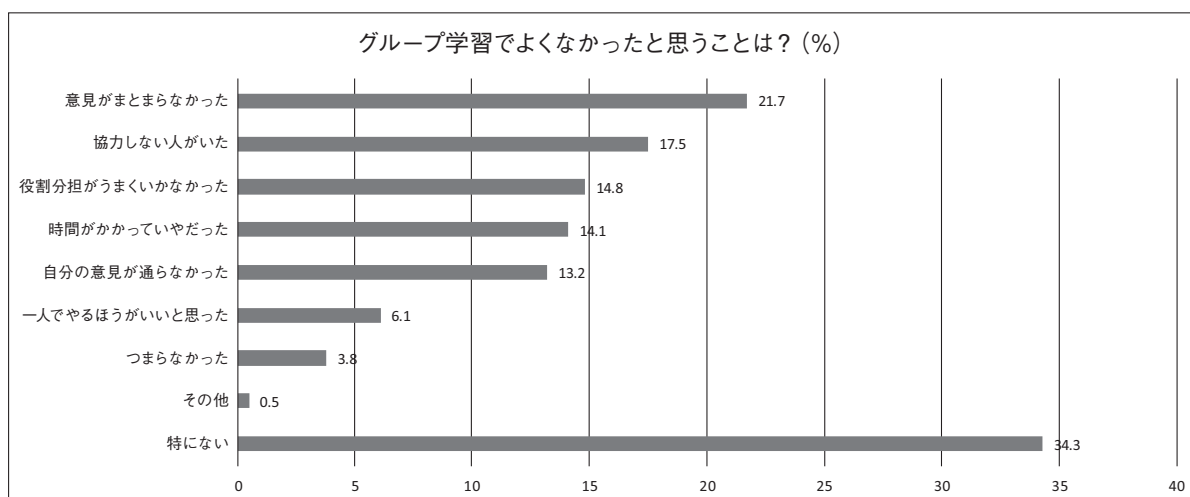


図3 「あなたが、グループ学習でよくなかったと思うことはどんなことですか。」(改編)

ペアやグループによる場面を授業で取り入れると、児童生徒が自分の考えを一人で考えていたときよりも気づかなかったことを互いに気づくことができるようになる。このような学習が成立するためには、児童生徒の人間関係づくりが極めて重要であることがわかる。

5. 学級づくりの重要性

どのように児童生徒が主体的な学びができるように指導過程を工夫しても、学級集団の様相によっては、学びが十分成立しない場合もある。学習の成立には児童生徒の発達段階に応じた集団づくりや集団と個の関係づくり等が必要である。きめ細かな配慮をし、指導計画を立て、学習課題や教材の工夫をした授業であっても、児童生徒の学びに対する構えや互いに協力して学び合おうとする姿勢が足りなければ、指導の「空回り」や児童生徒の学習への「停滞」が起こるのである。学級での児童生徒相互の理解に基づく、望ましい人間関係をめざす学級づくりが重要である。

学習指導要領の変遷を見ると、小中学校の第3次改定(昭和43年、昭和44年)において「各教科」、「道徳」、「特別活動」の3領域が確定し、人間としての調和的発達をキーワードとして教育が展開された。このうち特別活動は、歴史的な経緯はあるものの学級づくりに大きな役割を果たしてきた。「班づくり」、「リーダー育成」、「学級討議の方法」など児童生徒の発達段階に応じた様々な活動が行われた。各地域の教育研究団体においても、学級づくりや学級指導の実践交流が盛んに行われ、いわゆる学級経営の質や内容の向上が促された。

この後、平成10年の学習指導要領の改訂に伴い、「総合的な学習の時間」が創設された。すでに広く知られているように、総合的な学習の時間は、変化の激しい社会に対応して、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てることなどをねらいとするものである。すなわち、「生きる力」をはぐくむことが求められたのである。

各学校では、総合的な学習の実際、充実のために教育課程を編成し、さらに指導体制や具体的な学習の進め方を検討、工夫し教育活動を展開した。この学習では概ね学級を単位に行われるために、学級で児童生徒が課題を見つけ、その解決のためにどのような活動を行い、その成果を発表・共有するなどの学習過程が設定され、実践された。授業時数が多く、学習過程も多様であり児童生徒自身が学

習計画を立案するなどの新たな活動が行われるようになった。すると、学級や学校の生活づくり、集団と個の関係理解、自己と他者の個性の理解と尊重といった学級活動の充実に向けた取組が取り上げられる機会が先に述べたほどではなくなった。

今、「主体的・対話的で深い学び」が提唱されているとき、児童生徒が学ぶ基本的な集団である学級集団において、「よりよい人間関係づくり」をめざす学級づくりがあらためて重要である。学級では児童生徒一人一人が認められ、集団と個の関係が保たれながら、互いに尊重する学級の中で、初めて多様な考えを発表し、批判しあい、よりよい解決策を模索することができるようにするのである。

6. よりよい人間関係の構築をめざす学級づくり

学校では授業を中心として様々な学習形態が実践され、とりわけ児童生徒が課題について話し合う学習が取り組まれている。これまでの多くのこのような学習では、指導している先生が「結論」あるいは、「まとめ」を予め用意していることが見られる。児童生徒にとっては、長い時間をかけて準備し、話し合いをして「対立点」や「新たな課題」を見つけたにもかかわらず、最後は「先生がまとめる」、すなわち最終地点が定められていると思いがちである。しかし、新しい教育の展開には、どちらの意見も考え合わせた上で、どうすればお互いが納得できるのか、第三の意見を出し合う場にすべきである（石川 2017）と述べている。さらに、双方の考えを大事にしながら、児童生徒同士で最適解を探す（石川 2017）ことも提案している。

児童生徒が学校生活において最も基本的で親密な生活単位は学級である。成長に応じて自身が考えることを述べ、互いの意見を尊重し合いながら児童生徒自身の向上、そして所属する集団を協同で高めるための様々な活動が展開される。新しい教育の展開にあたっては、先に述べたように学級での児童生徒相互のよりよい人間関係があってこそ、児童生徒が自らの考えを述べ、所属する集団の成員から尊重されながら、必要に応じて批判しあい、問題の解決策を模索できる。

児童生徒が学級において、望ましい人間関係を築き、自らの生き方について考える場づくりとして特別活動がある。この特別活動の特質として「望ましい集団活動」が示され、児童生徒が集団活動をとおして人間形成を図ろうとする教育活動である。ここでは、集団の一員としてよりよい生活、そして人間関係づくりをめざすのである。これらの指導や活動によって、集団は所属する一人一人を大切にすることができ、児童生徒自身は集団の一員としての自覚や集団に貢献しようとする意欲や態度を育てることができる。

新しい教育の展望が示され、「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業改善が求められている。児童生徒は、教科の学習において、知識や技能を身につけていくだけではなく、物事をどのような視点で捉え、考えていくのかについて学ぶことになる。そこでは、知識や技能を知っていて、使えることはもちろん、新たな見方や考えを創り出すことが求められている。児童生徒同士が、自らの考えやアイデアを出し合い、創造的な解決を見いだすことが必要である。「ゴールが決まっている話し合い」、「そうなりそうな結果」ではなく、児童生徒同士が励まし合い、時には批判し合いながら学ぶのである。今以上に授業においては、学びの主体が児童生徒であることの再確認と指導過程、教材等の工夫が求められる。

これらの学習が成立するためには、児童生徒が互いに理解し合い、他者の考えを尊重する姿勢や態度の醸成が欠かせない。例えば、数学科の授業で、班などの小集団活動での問題解決の学習を経て、

班ごとの発表・交流が行われ場面がある。ここで、単に「解ありき」ではなく、その過程での考え合い、試行錯誤、批判が行われるようにすべきなのである。社会生活にあっては、自らの考えを発表したり表現したりし、時には批判されながら互いに協力してよりよいアイデアとして創ることは頻繁にある。学校教育においても、児童生徒が所属する集団の一員としてものごとを考え、互いに尊重しながら高め合うことができるようにしたい。これらのことは、教科などの学習だけで育てるのは難しく、児童生徒が所属する学級での人間関係づくりの構築のあり方が問われていると言える。

では、学級ではどのような人間関係づくりを意識されるとよいのだろうか。児童生徒が協働的な学習の基礎となるのは、よりよい人間関係である。児童生徒誰もが、学級にすることが安心で、自らのよさを発揮し、意欲的に学びに向かうことができる集団形成が必要である。児童生徒が学級でのよりよい人間関係を構築するための指導のポイントは次のように提案できる。

① 話し合いや討議の仕方を学ぶ

小学校では、学年に応じて意見の発表の仕方や述べ方を訓練する。中学校でも、話し合いの進め方や他者の意見を聞いて自分の考えを述べる方法を実際の話し合い活動を通じて学ぶのである。

② どのような考えでも尊重しあう集団づくり

学級で生活している一人一人がそれぞれいろいろな考えをもっていて、それらを尊重する集団であることが実感できる経験をする。もちろん、非社会的、反社会的な言動まで認められる集団ではない。

③ 解のない話し合いを学ぶ

学級での生活に必要な事柄を決める活動だけでなく、意見や考えを出し合うことによって互いの理解を深める話し合いを経験する。

これらことが学級づくりの根幹として、系統立て、意図的に整理され、児童生徒の発達段階に応じて実践されるべきであろう。そして教科での学習において、考え合い、練り合う学び合いが行われるのではなく、日々の学級生活において機会あるごとに人間関係づくりを意識する活動が展開されるべきである。そのことによって、学級での相互理解が深まり、話し合いのルールを身に付けることによって、教科での児童生徒の学びの広がりや充実につながる。

「主体的・対話的で深い学び」の実践に向けて教材研究や指導過程の工夫はもちろん大切である。しかし、学びの主体である児童生徒一人一人が尊重され、自らの考えをのびのびと発表できる学級集団でなければ、いかなる学習内容の工夫改善も実を結ばない。今こそ、学級づくりの充実が望まれている。

文献

- 石井英真, 2015, 『日本標準ブックレット NO.14 今求められる学力と学びとは—コンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影—』株式会社 日本標準.
- 石川一郎, 2017, 『2020年からの教師問題』KK ベストセラーズ.
- 江森英世, 2016, 『アクティブ・ラーニングを位置づけた中学校数学科の授業プラン』明治図書出版株式会社.

中央教育審議会，2016，「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」文部科学省ホームページ，（2017年1月20日取得，http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf）.

常田拓孝・兵藤貴信，2017，「中学校数学科における自力解決と練り上げによる授業構成に関する研究」. 『北海道文教大学研究紀要』41：31-40.

日本経済団体連合会，2016，「今後の教育改革に関する基本的考え方ー第3期教育振興基本計画の策定に向けて」日本経済団体連合会ホームページ，（2016年11月17日取得，<http://www.keidanren.or.jp/policy/2016/030-honbun.pdf>）.

**Analyzing the New Way of Learning for Japanese Students According to
the New Ministry of Education Guidelines:
From the Point of View of Classroom Management to Make Desired Relationships among Students**

TSUNETTA Hirotaka

Abstract: The next guidelines for students in Japan have been announced publically, stating how Japanese education should build the society by 2030 and beyond. It emphasizes lifelong learning and curiosity about research, emphasizing personal student experience in cooperation with other students by jointly making things, resulting in personal satisfaction and enjoyment in learning.

Keywords: subjective, interactive deep learning, desired relationship among students, special activities